

観天 望気

プロセスの価値

農林水産業はESG投資の中でどう位置づけられるのか。

ESG投資は、環境、社会、企業統治に配慮した事業体に資金を融通する仕組みである。持続可能性に配慮したビジネスの成長促進をめざす趣旨だ。生産のプロセスが環境や社会などに配慮していれば投資対象として優遇される。その意味では、プロセス重視の発想がESG投資に存在しているといえる。

一方で近年の農林水産業は、生産プロセスよりも、成果物だけで評価される要素が強い。国際市場で取引される小麦やトウモロコシは、需給に応じてトンあたり何ドルと値決めされ、生産プロセスなどは問われない。日本でも消費者の多くは、スーパーで販売されるコメについて、値段や味、食感などには関心を払うが、細かい生産プロセスまではあまり気にしない。水田は貯水機能を有し、トンボやカエルの生息地となり、良好な景観を提供するなどの多面的機能を有するが、これらの機能があるからといってコメの価格が上昇する例は少ない。冬季の水田にあえて水を張り、ミミズなどの生き物を多く保持することで渡り鳥の越冬地を提供する「ふゆみずたんぼ」や、周辺の湖沼に生息するフナが春に水田で産卵しやすいように水路を工夫する「魚のゆりかご水田」など、消費者に評価されている例はあるが、評価が一般化している状況ではない。

そもそも農林水産業は、天候など人間の努力以外の要素が成果に大きく影響する。人間の努力が成果に直結する場合は成果主義で評価されてもよいが、人間の努力以外の要素が大きく成果に影響する場合はプロセスも評価されるべきであろう。これがないと、プロセスは継続できず、農業の多面的な機能も維持されない。

ESG投資では、デジタル技術を活用するスマート農業などが注目されがちであるが、それだけでなく多面的機能維持に資する農林水産業の事業者も対象として優遇し、農業のプロセス面に配慮を示すことが、その本来の趣旨に合致しているように思える。



八木 信行

東京大学大学院農学生命科学研究科 教授

やぎのぶゆき

東京大学農学部卒業。米ペンシルバニア大学経営学修士(MBA)。東京大学博士(農学)。農林水産省勤務を経て、2008年東京大学特任准教授、11年同大学大学院准教授、17年より現職。主な研究テーマは食品マーケティング、水産経済学。FAO(国連食糧農業機関)の世界農業遺産関連の委員なども務める。